



(財) 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL(082)241-5246(代表) FAX(082)542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成22年(2010年)10月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

2020核廃絶広島会議



ヒロシマアピールを発表する市民代表

一刻も早い核兵器の廃絶に向け、
ヒロシマアピールを発表！

七月二十八、二十九日の両日、広島国際会議場で、「核兵器廃絶の実現を目指して」をテーマに「二〇二〇核廃絶広島会議」を開催しました。この会議には、世界十六カ国から六十九都市と五十一のNGO(非政府組織)、十二の各国政府、国際機関の代表が参加し、NPT(核不拡散条約)再検討会議の結果を踏まえ、二〇二〇年までの核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けた新たな取組について協議しました。

開会式

最初に、秋葉忠利・広島市長が主催者を代表して挨拶を行い、「核兵器廃絶実現のために必要なのは、各国政府首脳の政治的意志であり、この政治的意志は最終的には世論の力によって形成される。この会議をきっかけに具体的な活動を始めたいという決意を持っていただきたい」と呼び掛けました。その後、有岡宏・広島県副知事、藤田博之・広島市議会議長が祝辞を述べられ、最後に、潘基文・国連事務総長のメッセージがベリン・マッケンジー・ユニタール広島事務所上席専門官によって

目次

2020核廃絶広島会議.....	1~2	新着資料展を開催中/中・高校生の平和学習にワークブックをご活用ください/国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」を開催.....	9
被爆65周年広島平和記念式典/ ロシア・ボルゴグラード市、モスクワ市等を訪問.....	3	中・高校生ピースクラブ/平和への思い育む夏のキャンプ/ 多言語に翻訳した被爆体験記を公開しています.....	10
長崎市での国際平和シンポジウムに出席/ヒロシマ・ピースフォーラム/ 秋葉市長がラモン・マグサイサイ賞を受賞.....	4	英語で学ぶ「ヒロシマ」/「原爆の絵」が完成.....	11
被爆体験記「私の8月6日」.....	5	「姉妹・友好都市の日」記念イベント.....	12
国内原爆展を開催/ニューヨーク・ロンドンで海外原爆展を開催/ 平和記念資料館の入館者が6000万人に到達.....	6	青少年のための国際交流・協力セミナーを開催/JICAボランティアが千羽鶴奉納/ 外国人市民の生活相談コーナーを開設しています.....	13
米大学生が被爆地で現地学習/ひろしま子ども平和議会を開催/ 被爆体験講話会を開催.....	7	留学生のための防災センター訪問/留学生による平和フォーラム.....	14
平和記念資料館・追悼平和祈念館 共同企画展「国民義勇隊」.....	8	平和について思う「若者へ平和を問う」.....	15
		ヒロシマを朗読によって伝えたい「ひろしま音読の会」.....	16

紹介されました。

被爆体験証言

十六歳のときに、現在の広島市中区千田町で被爆した松島圭次郎さんが、被爆当時の悲惨な様子について語り、共通の目的である平和な未来のために、核兵器廃絶についてみんなが考えるべき時であると訴えました。

基調講演

カナダの下院議員、上院議員、軍縮大使を歴任され、国際的NGOと中堅国家が連携して核保有国に核軍縮交渉を促す運動を展開する「中堅国家構想」を提唱・創設し、現在その名誉議長を務めておられる、ダグラス・ロウチさんが、「今こそ核兵器禁止条約を」というテーマで講演されました。

講演の中でロウチさんは、「今、初めて全ての核兵器を禁止する世界的な条約の制定が、全ての国の同意の下、国際的な議論の相上りによって」と指摘した上で、核兵器禁止条約のこれまでの展開について解説し、核兵器廃絶に向けた分野で活動する人たちに対し、歴史の正しい側面にあるから自信を持つよう語り掛けました。さらに、地球上の全ての生命を破壊する核兵器の禁止に向けて、人類の良心に絶えず訴え

かけ、世論を盛り上げて行くよう呼び掛けました。

また、基調講演の後には、これまでのロウチさんの平和活動に対する功績に対し、広島市特別名誉市民の称号が贈呈されました。

会議 I

梅林宏道・NPO法人ピースデポ特別顧問のコーディネーターにより、「NPT再検討会議の結果を踏まえた今後の活動のあり方―核兵器廃絶への次のステップ―」のテーマに沿って議論を行いました。

会議では、田上富久・長崎市長を始め、国際機関、外務省などの政府関係者、国内外のNGOの代表らがそれぞれの立場から発言を行ない、核兵器廃絶に向けた国連の現場、NPT再検討会議の実状、日本政府の考え方、国内外のNGOや広島・長崎の核兵器廃絶に向けた運動の現状が紹介されました。

会議 II

川崎哲・国際交流NGOピースポート共同代表のコーディネーターにより、「世界的な展開に向けて―国、都市、NGOの連携及び平和市長会議の役割―」をテーマに具体的な活動内容について議論を行いました。

国内外の自治体の代表や、各種団体、NGO代表、各国大使館の代表



会議 I で発言する国連軍縮部上席政務官 (右端)

が発言し、活動報告や具体的な取組の提案を行いました。川崎さんは「核兵器廃絶」というテーマは壮大であるけれども、我々は地球社会という一つの共同体の構成員であるという共通認識を持って、私たち市民が進めて行くことがその目標を達成することにつながる」と締め括りました。

市民対話集会

「核廃絶に向け、私たち市民は何をすべきか」をテーマに、佐渡紀子・広島修道大学法学部准教授のコーディネーターにより、市民対話集会を行いました。

まず、平和市長会議が掲げる二〇二〇ビジョンの実現に向け、

様々な取組を行っている三つの市民団体がその取組について報告しました。

次に、会場から日々の活動や支援のあり方について発言を募り、時間一杯まで、様々な意見・提案がなされました。終わりに、佐渡教授が、「市民は国や組織といったしがらみから唯一自由であり得る存在であり、今日共有できた市民の活動の経験を活用して、さらに活発な活動が展開できる」と述べて締め括りました。

国内加盟都市会議

「二〇二〇核廃絶広島会議」に参加した国内自治体の首長及び代表者の皆さんと、平和市長会議の国内加盟都市会議を開催し、平和市長会議のこれまでの取組についての説明とともに各自自治体の平和への取組について意見交換を行いました。

会議 III

前日、基調講演を行なったダグラス・ロウチさんのコーディネーターにより「二〇二〇年までの核兵器廃絶に向けて」というテーマで、平和市長会議を始めとする世界の平和NGO等の取組の方向性について議論を深めました。

始めに、会議 I と会議 II の議論をまとめた後、自治体、NGOの代表者を始め、会場からも多数の意見が交わされました。ロウチさんは、「核兵器廃絶に向けて今がそのときであり、被爆者が存命の二〇二〇年という時間枠の中で核兵器廃絶に向けて、今までにない広がりを持った連立・連携が必要である」と締め括りました。

閉会式

最初に、秋葉市長から、アピール起草委員が紹介され、ねぎらいの言葉が贈られました。次に、起草委員のアーロン・トビッシュ・二〇二〇ビジョンキャンペーン事務局国際ディレクターから、アピール起草委員会の審議経過について説明があり、市民の代表が「二〇二〇核廃絶広島会議アピール(ヒロシマアピール)」を読み上げました。

最後に、秋葉市長が挨拶を行い、「このヒロシマアピールを世界に広げ、活動につながることを私たちのなすべきことだ」と訴え、二日間に渡って開催された「二〇二〇核廃絶広島会議」を終了しました。ヒロシマアピールは左記でご覧頂くことができます。

www.mayorforpeace.org

(平和連携推進課)

被爆六十五周年平和記念式典 二〇一〇年までの核兵器廃絶 のため、更に大きくなり

被爆六十五年目の八月六日（金）、広島市の平和記念公園で、市主催の「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」（平和記念式典）が行われ、遺族ら約五万五千人が参列して犠牲者の冥福と恒久平和を祈りました。

式典は午前八時に始まり、最初に秋葉忠利・広島市長と遺族代表二人が、この一年間に亡くなったことが確認された五千五百一人の氏名が記載された二冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は二十六万九千四百四十六人、名簿総数は九十七冊となりました。また、この名簿とは別に、新たに四名の氏名が記載されて名簿登録者総数が八名となった、長崎原爆死没者名簿（広島奉納希望者）一冊を奉納しました。

続いて藤田博之広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された八時十五分に遺族代表の石川典宏さんと子ども代表の椎木咲来さんが平和の鐘をつき、参列者全員が一分間の黙祷を捧げ

ました。

この後、秋葉市長が「平和宣言」を行い、「全ての被爆者が「生きていて良かった」と心から喜べる、核兵器のない世界を一日も早く実現することこそ、私たちが人類に課せられ、死力を尽して遂行しなくてはならない責務である。」と力強く訴えました。

昨年四月のオバマ米国大統領のプラハ演説や、今年五月の核拡散防止条約再検討会議の最終文書採択などにより、世界的に核兵器廃絶への期待が高まる中で行われた今回の式典には、四十一都道府県の遺族代表をはじめ、内閣総理大臣、広島県知事、国際連合総会議長、そして初参列となる国際連合事務総長や核保有国の米国、英国、仏国の大使を含む、過去最多の七十四カ国の代表が出席しました。

「あいさつ」の中で、潘基文国際連合事務総長は、核兵器がなくなる日まで燃え続ける平和の灯にふれ、「被爆者の方々が生きているうちに、皆でヒロシマの炎を消し、希望の光へと変えましょう」と、核のない世界の実現を呼びかけました。

式典で読み上げられた「平和宣言」「平和への誓い」の全文は広島市ホームページの「原爆・平和」↓「平和宣言・平和への誓い」平和に関する要請等」から、また、「平和宣言」は、<http://www.pdf.city.hiroshima.jp/declaration/japanese/>からも閲覧できます。（総務課）

ロシア・ボルゴグラード市、モスクワ市等を訪問

秋葉忠利・広島市長は、九月三日（金）～九月十日（金）、広島市の姉妹都市で平和市長会議副会長都市のボルゴグラード市を訪問し、同市の創設記念日である「ボルゴグラードの日」記念行事に出席するとともに、首都モスクワ市を訪問し、平和市長会議への加盟など、核兵器のない世界に向けた活動について協力を訴えました。

「ボルゴグラード市の日」記念行事の中で、秋葉市長の功績に対して特別名誉メダルが贈呈されました。続いて、ボルゴグラード市近隣都市の代表と面会し、平和市長会議への加盟を呼び掛けました。

その後、ママエフの丘で戦争の犠牲者に追悼の意を表した後、スターリングラード攻防戦パノラマ博物館で講演を行い、「核兵器禁止条約等を通じた核兵器の廃絶が国際社会の最優先事項であり、それを成すのはまさに今である」と訴えました。

九月五日（日）

ボルゴグラード市庁舎でローマン・グレベニコフ市長と面会し、ロシア国内での平和市長会議加盟促進の働き掛けを要請するとともに、両市の今後の協力の新たな可能性について協議しました。

その後、イリーナ・カレワ市議会議長の案内で議場を視察した後、同議長と両市の市政について意見交換を行いました。

九月六日（月）

ボルシスキー市を訪問し、マリア・アフアナシエワ市長と面会しました。秋葉市長は本年四月の同市の平和市長会議加盟に感謝し、二〇二〇年までの核兵器廃絶に向けて共に努力するよう呼び掛けました。

午後には、ボルゴグラード市内で行なわれたワールド・ハーモニー・ランの出発式に出席し、平和を訴えるためロシア各地から集まったランナーを激励しました。

九月七日（火）

ロシア連邦議会国家院（下院）内務・自治委員会委員長のベジストラフ・ティムチェンコ議員と面会し、ロシア国内での平和市長会議加盟促進への協力を要請し、同議員は協力を約束しました。

その後モスクワ市役所でユーリ・ルシコフ市長に面会しました。同市長は「広島への被害は、核兵器を使

ってはならないことが絶対のルールだ」という世界への訴えになった」と述べました。秋葉市長は平和市長会議加盟促進への協力を要請するとともに、二〇二〇広島オリンピックの実現に向け検討していることを紹介しました。

九月八日（水）

モスクワ市内のゴルバチョフ財団でミハエル・ゴルバチョフ元大統領と面会し、十一月に広島市で開催されるノーベル平和賞受賞者世界サミットへの出席を要請しました。同氏は広島訪問を快諾し、サミットでは被爆者の平和への貢献に何らかの形で感謝したいと述べました。面会後、財団の資料館を視察するとともに、ノーベル平和賞受賞者世界サミット事務局職員との協議を行いました。

九月九日（木）

モスクワ郊外の「国立ロシア心臓学・科学・生産コンプレックス」でIPPNW（核戦争防止国際医師会議）の共同創始者であるエフゲニー・チャゾフ総院長と面会しました。秋葉市長はチャゾフ博士のこれまでの活動に感謝の意を表し、平和市長会議の活動を紹介するとともに十一月のノーベル平和賞受賞者世界サミットへの出席を要請しました。

（平和連帯推進課）

長崎での国際 平和シンポジウム に出席

八月七日(土)に長崎市で開催された「国際平和シンポジウム」(主催―長崎市、財団法人長崎平和推進協会、朝日新聞社)に、本財団からステイブン・リーパー理事長が出席しました。このシンポジウムは、平成十八年から広島市と長崎市において毎年交互に開催されています。今年も長崎市で開催され、本財団は広島市とともに当シンポジウムを後援し、側面的な支



核兵器廃絶について議論を行うパネリスト (写真提供:朝日新聞社)

援・協力を行いました。

今回のシンポジウムは、「核兵器廃絶への道―二〇一〇年ナガサキ―」をテーマに、朗読劇、基調講演、高校生対談、パネル討論の四部構成で行われ、三百五十名が参加しました。

第一部では、市電で被爆した車掌姉妹を描いた朗読劇「チンチン電車の詩」が上演されました。第二部では、河野洋平・前衆議院議長と天野之弥・国際原子力機関(IAEA)事務局長がそれぞれ「核廃絶へ向けて」、「核廃絶―IAEAができること」と題して講演を行いました。第三部では、長崎の高校生二人が対談し、被爆地長崎の自分たちが被爆の実相を伝えていく決意を語りました。第四部では、米國・スタンフォード大学教授のスコット・セーガン氏、内閣府原子力委員会委員長代理の鈴木達治郎氏、内閣副大臣で民主党核軍縮推進議事事務局長の平岡秀夫氏、長崎市長の田上富久氏をパネリストに、朝日新聞社論説主幹の大軒由敬氏をコーディネーターにパネル討論が行われ、世界の核情勢を踏まえた核兵器の廃絶について活発な議論が行なわれました。

(平和連帯推進課)

ヒロシマ・ピース フォーラム

本財団は広島市と共催で、市民が「平和の原点」としての「ヒロシマ」を見つめ直し、原爆や平和について考え、どのように行動していけばよいかを探索する機会として、平成十四年度から「ヒロシマ・ピースフォーラム」を開催しています。本年度も五月から七月までの隔週土曜日に計六回開催し、

十代から七十代までの七十三名が参加しました。

また、昨年度に続き、広島市立大学において、学外の専門家から被爆体験の継承や平和の実践活動を学ぶ「広島からの平和学・実践の方法」と連携して開催し、相互に連携・補完することにより双方の講座内容の充実を図りました。

引き続き、グループ討議を充実し、まとめの発表をシンポジウム形式で行うなど参加者間で活発な意見交換ができる取り組みを行いました。参加者のアンケートでは、「異なる年代や様々な視点からの意見を聞くことができ、興味深かった」、「平和、ヒロシマについての知識や考えをより深めることができた」などの感想が寄せられました。

回	日時・場所	内容	講師
1	平成22年5月8日(土) 13:30~17:00 広島平和記念資料館 地下1階 会議室(1)	2020年までの核兵器廃絶を目指して―2020ビジョンキャンペーンの展開― ヒロシマを学ぶ意義	(財)広島平和文化センター 常務理事 日本 原平 広島平和研究所 教授 水本 和実 広島平和研究所 教授 水本 和実
2	平成22年5月22日(土) 13:30~17:00 広島平和記念資料館 地下1階 会議室(1)	被爆体験証言 原爆被害者の医学的影響―過去・現在・未来― 広島平和記念資料館の概要と見学	(財)広島平和文化センター 被爆体験証言者 新名 晴文 (財)広島県被爆者保護事業団 理事長 鎌田 セリ 広島平和記念資料館 (寄贈担当) 副館長 山根 直由美 アーカイヴカルチャー広島 樹木医 進口 力
3	平成22年6月5日(土) 13:30~17:00 広島平和記念資料館 地下1階 会議室(1) メモリアルホール	今も生き続ける被爆樹木 広島への平和思想を伝える	広島大学 名誉教授 舟橋 聖恵
4	平成22年6月19日(土) 13:30~17:00 袋町小学校平和資料館 広島平和記念資料館 地下1階 会議室(1)	山崎は小娘で 袋町小学校平和資料館 紙芝居仕立ての講義を通した平和活動について	袋町小学校平和資料館 運営協力員 松本 仁 講師 秘伝軍 聖助 (参加者側でのグループ討議)
5	平成22年7月3日(土) 13:30~17:00 広島平和記念資料館 地下1階 会議室(1)	幼少地帯における平和構築と広島市の復興の歴史の意義 グループ討議 (課題1) ヒロシマ・ピースフォーラム全体を通して、新たに教えられる、気づき、意識を新たにしたこと (課題2) 平和な世界を創造するために、私たちに何ができるかを整理してみよう。 ① 広島市の被爆体験を土台に考えられること ② 今の世界の現状を見て必要だと考えられること	広島大学平和科学センター 准教授 藤田 美樹 (参加者側でのグループ討議)
6	平成22年7月17日(土) 13:30~17:00 広島平和記念資料館 地下1階 会議室(1)	被爆体験と世界の平和はどう結びつくるのか グループ討議 第5回(7月3日)のグループ討議(続き)及びまとめ、発表・意見交換	広島平和研究所 教授 水本 和実

(平和連帯推進課)

その内容は一覧表のとおりです。

秋葉忠利広島市長が 「ラモン・マグサイサイ賞」 を受賞



八月三十一日、フィリピンマニラ市において、秋葉忠利広島市長が「ラモン・マグサイサイ賞」を受賞しました。元フィリピン大統領ラモン・マグサイサイ氏を記念して創設された同賞は、毎年、アジア地域で社会貢献などに傑出した功績を果たした個人や団体に贈られ、「アジアのノーベル賞」とも呼ばれています。過去には、マザー・テレサ、ダライ・ラマ十四世など、二七七個人・団体が受賞しており、この内、日本人受賞者は、平山郁夫氏、緒方貞子氏など二十三人です。

今回の受賞は、秋葉市長が「核戦争の危機のない世界を築くため、市民社会を動かし、各国政府に圧力をかけ、政治的意思を形成するという持続した世界規模の取り組みにおいて、信念に基づいた確固たる指導力を発揮していること」が評価されたものです。

(市民局平和推進課)



プロフィール
 [くにしげ まさひろ]
 昭和6年4月3日生まれ。県立広島二中2年の14歳の時、爆心地から約2キロの東練兵場で被爆。顔面、腕などに火傷した。前日の8月5日は、旧広島県庁付近で建物疎開作業に従事し、「あの日」は交替の1年生322人が現在の平和記念公園で犠牲となった。

被爆体験記

私の八月六日

財団法人広島平和文化センター 被爆体験証言者

國重 昌弘

戦時下の中学生

太平洋戦争の末期、成年男子の多くが戦線や軍需工場に徴用され、その穴埋めの形で、中学三年生以上は兵器工場などに通年動員され、一、二年生は交替で建物疎開などの勤労奉仕に従事していました。建物疎開は、B29爆撃機による焼夷弾攻撃で全国の主要都市が次々と焼かれていくため、軍都・広島でも中心部の民家一万六千戸を東西四キロ、幅百メートルにわたって取り壊し、この空き地と七つの川で延焼を防ぐという狙いでした。この作業に従事中に被爆死した中学・女学校の一、二年生は、約八千人にのぼります。当時の建物疎開の跡が現在の平和大通りなのです。

八月六日

私たち県立広島二中の二年生は、八月五日に旧広島県庁（現在の加古町）周辺の建物疎開作業に従事し、六日は広島駅裏の東練兵場にいました。この日は登校日だったので、急遽、練兵場の芋畠の草取りになったのです。

午前八時、先生の「集合！」の声に二年生約三百人が整列を終えた時、級友のひとりが「空襲警報は解除になったのに、爆音がするのう」と言うので、上空を見ると東から飛んで来たB29が急に北に

向きを変えた、と思ったら光るものが二つ、三つ…。

私の記憶は、そこまでです。
ピカドン

気がついた時は、熱線と爆風でなぎ倒され、芋畠の中に折り重なっていました。白い煙の中でうごめく人影と級友の顔がやっと見え始めたと思ったら、どの顔も灰色で、血の気がない。土埃で汚れたのかと、友人の頬をさわると、顔の皮がズルッと剥けました。思わず手が震えました。隣の友達が「お前の方がもっとひどいで」と言うので、そっと頬に触れたら、皮がズルリと垂れ下がりました。

これでは草取りどころではない。急遽「作業中止。解散」ということになりましたが、顔全体と左腕に火傷していた私は、暫く芋畠に座り込んだまま動く気力もありません。

上空を見ると、積乱雲のような雲が、赤い炎を巻き込んで、物凄い勢いで天空へと昇っていき。市の中心部は一面火の海で、半身火傷の兵隊、下半身ボロボロ下げたような女学生の集団、火傷と包帯の警官に引率された囚人らしき群れ…いずれも幽霊の様に、両手を前に差し伸べたような姿で逃げてきます。

逃避行

唇過ぎになったところでしょ

うか。治療や救援の見込みもないので、市の西部から通学している仲間七人と、燃えている中心部を迂回して、戸坂、緑井、己斐のコースで家を目指しました。道端には瀕死の重傷者が「水をください」と叫びていましたが、私たちも歩くのがやっとの状態、助けのすべもありません。そのうち私ら自身、ノドの渇きに耐えられなくなり、途中の救護所で「水をください」と訴えましたが、「火傷の人が水を飲んだら死ぬ」と、油のよつなものを塗ってくれただけで、飲ませてくれません。そんな時、農家の裏にある井戸を見つけ、「もう我慢できません。死んでもええ」と、釣瓶で汲んだ井戸水を、私が最初に飲みました。あの時の冷たい水の味は生涯忘れることはでき



吉島陸軍飛行場方面に逃げてゆく人々
 「市民が描いた原爆の絵」池亀春夫さん作

ません。もっとも、十分も歩かぬうちに火傷部分が水入りのゴム風船のように膨らみ、救護所で聞いた警告に怯えることになりましたが。

夕方近く、やっと己斐駅までたどりつき、車の救援トラックに乗せてもらって廿日市の自宅まで帰りました。

仇を討つ

両親の顔を見た時は涙が止まりませんでした。その夜から新たな地獄が始まりました。母親に頭を押さえられ、父親がピンセットで火傷の皮膚を剥ぎ、毎日四回、カサバタを剥いで白い油薬を塗りました。それはギザギザの缶の蓋で引掻かれるほどの痛みでした。そんな時、「痛いよ、この仇はとってやる」と叫んでいたそうです。

被爆証言

一日違いで生きながらえた私たち二年生は、「身代わり」となって死んだ一年生に対するうしろめたさのようなものを引きずって生きてきました。そして被爆六十五年、テレビで戦後生まれの「語り部」の存在を知り、生き残った私たちが証言すべきではないかと気づかれました。それが石に刻まれた一年生の無念の思いを代弁することになるし、地球上から核兵器を廃絶することが、私の「仇討ち」にも通じると思うからです。

国内原爆展を開催

本財団では、原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶への機運を高めるため、平成八年度から国内主要都市で原爆展を開催しています。

本年度は、北陸地方四箇所で開催しました。

【富山市】

ヒロシマ原爆展・富山大空襲展
日時：七月二十六日(月)～
八月一日(日)(七日間)

場所：富山国際会議場

【金沢市】

ヒロシマ原爆展 in 金沢
日時：八月五日(木)～
十一日(水)(七日間)

場所：金沢駅もてなしドーム地下
イベント広場

【坂井市】

ヒロシマ原爆展—いつまでも平和であるために—
日時：八月二十一日(土)～
二十三日(月)(三日間)

場所：ハートピア春江
【永平寺町】

ヒロシマ原爆展
日時：八月二十七日(金)～
二十八日(土)(二日間)

場所：大本山永平寺

会場では、被爆の実相や核兵器の現状を伝える写真パネルや被爆資料の展示、記録映像等の上映のほか、市民が描いた原爆の絵の展示等を行いました。

また、富山市及び金沢市では被爆体験証言者の新宅勝文さんが、坂井市では長尾ナツミさんが証言を行いました。また、金沢市、坂井市及び永平寺町では、追悼平和祈念館の朗読ボランティアによる被爆体験朗読会もあわせて開催しました。

四会場を合わせて、約一万四千名が来場しました。来場者からは「被爆の悲惨さや被爆後の苦労などを聞き、胸が詰まる思いだった。これからも次の世代のために被爆体験を伝えていって欲しい」「朗読会は、当時の様子がわかり、とても良かった」などの感想が寄せられました。どの会場も、親子連れが多く見られ、原



坂井市での原爆展

爆展が家族で原爆や平和について考える良い機会となっていると感じました。
(平和記念資料館啓発担当)

ニューヨーク・ロンドンで海外原爆展を開催

今年五月に開催された核拡散防止

条約(NPT)再検討会議に合わせて、五月三日(月)から六月二十二日(火)までの期間、ニューヨーク国連本部ロビーにおいて「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催しました。主催は日本原水爆被爆者団体協議会(日本被団協)、広島市、長崎市、本財団、長崎原爆資料館。

原爆展会場には、原爆から放出される熱線、放射線などの影響や、被爆の実相、被爆者がどのような人生を送ってきたかを紹介する四十九点のパネルと、焼け焦げた学生服などの被爆資料六点の展示が行われました。また、パネルの前では日本被団協の証言者が自らの体験を話し、会場からは「知らないことを学ぶことができ、核兵器廃絶への思いを強くした」などの感想が寄せられました。八月二日(月)から十二日(木)までは、ロンドンの中心部にあるイベントホール「フレンズ・ハウス」

平和記念資料館の入館者が六千万人に到達しました



6000万人目の入館者となった北村亮さん(左端)とご家族

開館から五十五年になる広島平和記念資料館の入館者数が、九月五日(日)、六千万人に到達しました。六千万人目の入館者となったのは、福岡市東区の会社員、北村亮さん(33)です。記念品として、前田耕一郎館長から、資料館の図録「ヒロシマを世界に」を贈呈しました。

北村さんは家族三人で広島を訪問。「子どもにも見せてあげたい」と、中学校の修学旅行以来十数年ぶりに資料館に入館されました。

資料館の入館者数は、平成十四年八月に五千万人に到達しており、それから約八年で一千万人が来館したことになります。
(平和記念資料館啓発担当)

において、同原爆展を開催しました。

主催は核軍縮活動団体(CND)、広島市、長崎市、本財団、長崎原爆資料館。

会場には、被爆の実相や核兵器の現状などを示す写真パネル四十八点、八時十五分で止まった時計や溶けた仏像などの被爆資料十八点の展示が行われました。

開会初日の八月二日(月)には、主催団体であるCND所長のケート・ハドソン女史や、会場のフレンズ・ハウスを運営する平和軍縮プログラム課長のサム・ウォルトン氏をはじめ、来賓や関係者などが出席し、開

会式が盛大に行われました。

本財団からは、被爆体験証言者の川本省三さんが出席し、会場を訪れた約六十人を前に、自らの体験を話しました。原爆により被爆孤児として辛い体験を送らざるを得なかった川本氏の証言に深く心を動かされた人々が多く、「再びこのような不幸な体験が繰り返されぬよう、ぜひ広く、特に若い世代へ伝えて欲しい」との声が多く聞かれました。

展示会場にも多くの来場者があり、核保有国の英国で意義深い原爆展となりました。
(平和記念資料館啓発担当)

ヒロシマの心を伝える 米大学生が被爆 地で現地学習

本財団は、被爆体験を若い世代に伝えるため、世界の大学での「広島・長崎講座」の開設・普及に取り組みんでいます。

この一環として、被爆地での現地学習のため、五月に米国のインディアナポリス大学の大学生・教員あわせて十一人、六月に米国のセントラルコネティカット州立大学の学生・教員あわせて十四人が、それぞれ広島を訪れました。一行は本財団の協力で被爆の実相を学び、核兵器の廃絶と世界恒久平和を目指す「ヒロシマの心」について理解を深めました。

インディアナポリス大学
一行は五月十一日(火)から十三日(木)まで広島で初めて学習しました。十一日、広島平和記念資料館平和記念公園、旧広島市民球場の折り鶴展示などを見学。十二日午前松島圭次郎氏の被爆体験証言を聴いた後、原爆記録映画「マッシュルーム・クラブ」を鑑賞。午後は、広島城・中国軍管区司令部跡・縮景園と、放射線影響研究所の二グループに分かれて見学し、夕方には広島市の大学生と交流を行いました。十三



セントラルコネティカット州立大学一行(平和記念公園を見学)

日、原爆詩朗読を聴くとともに自作の詩を披露した後、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を見学しました。

セントラルコネティカット州立大学
一行は六月三日(木)から五日(土)まで広島で学習しました。

三日、松島圭次郎氏の被爆体験証言を聴いた後、広島平和記念資料館と平和記念公園を見学。続いて、原爆詩朗読を聴き、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を見学。四日午前、広島平和研究所を訪問し、田中利幸教授による講義を受けました。午後は引率の友田静子教授の母校、舟入高校を訪問。校内見学の後、国際コミュニケーションコースの授業で友田教授のスピーチを聴き、同コースの生徒達と二行がグループに分かれてディスカッションを行いました。また、放課後は演劇部の生徒との交流会を行いました。五日の午前は旧日本銀行広島支店、袋町小学

ひろしま子ども平和議会は、八月六日の平和記念日に、平和記念式典への参列などのために広島を訪れる子どもたちと広島の子どもたちが、平和への思いを言葉や音楽など様々な形で発表するイベントで、全国から参加した十四の団体の子どもたちが平和のメッセージを発表しました。



平和のメッセージの発表の様子

【参加団体・発表順】広島市立中島小学校 スマイルキッズ71、広島市立職町中学校 幟からNohoriへ、広島大学附属東雲中学校 From now、広島市立

平成二十二年八月六日(金)、広島国際会議場において、「ひろしま子ども平和議会」が広島に集う子どもたちから「メッセージ」を開催しました。

ひろしま子ども 平和議会を開催

校平和資料館、旧広島市民球場の折り鶴展示などを見学。午後、笠岡貞江氏の被爆体験証言を聴いた後、広島市立大学、広島経済大学等の学生と、ドイツ、カザフスタンからの留学生も交え、十五年戦争の中で広島原爆をどう捉え、記憶・継承するか、をテーマにしたディスカッションを行いました。若い世代同士で会話を弾み、大変有意義な交流を持つことができました。

被爆体験講話会を開催

被爆の実相を多くの方に

本財団は今年も、平和記念公園を訪れる人々が事前に申し込むことなく被爆体験を聴くことができ、被爆体験講話会を開催しました。

八月五日(木)から九日(月)、十三日(金)、十四日(土)の毎日定時に、全十二回の講話会(うち二回は英語による講話会)と原爆に関するアニメーションの上映を行いました。期間中、来場者のほとんどが広島県外からの方で、小



熱心に体験を語る被爆体験証言者

さな子どもから戦争を体験した世代の人まで、延べ千四百人もの来場者がありました。

(平和記念資料館啓発担当)

大州中学校 ねがい、広島市立長束中学校 生徒会執行部、東広島市立黒瀬中学校 放送部・英語部、広島市立安佐南中学校 演劇部、長野県山ノ内町立山ノ内中学校、広島市立大手町商業高等学校

校清きまごとの若人われら、広島市立基町高等学校 普通科創造表現コース、広島市立広島工業高等学校 平和の板金術師、神奈川県茅ヶ崎市ピーストレイン、長崎市立長崎商業高等学校 生徒会、広島市立広島商業高等学校

発表の後、全ての参加団体に「アオギリ賞」「キョウチクトウ賞」「折り鶴賞」の各賞を記念の楯とともに贈呈し、発表を称えました。この記念の楯は、広島市立基町高等学校の生徒の皆さんが、特別にデザインし、制作してくれたものです。

最後に、平和を願い会場が一体となって「アオギリのうた」を歌って終了しました。

(市民局平和推進課)

広島平和記念資料館・国立広島原爆死没者追悼平和祈念館共同企画展

国民義勇隊

原爆被害を大きくした広島市の建物疎開

■期間：十二月十五日(水)まで

■会場：平和記念資料館地下一階展示室(五)

六十五年間休むことなく、毎月六日に祈る女性たちがいます。広島から遠く離れた町や村で、原爆に家族を奪われた人たちが多くいたことを知っていますか。



浄行寺(広島市安佐南区川内)で祈る女性たち(平成22年5月6日)



建物疎開作業に向かう草津南町国民義勇隊(作者 木村秀男さん)

第二次世界大戦末期の二九四五年(昭和二十年)、日本のほとんどの都市が米軍による空襲を受けていました。政府は、連合国が上陸して日本本土で戦闘が行われることを想定し、これに備えて国民を動員するための組織「国民義勇隊」を編成しました。広島においても、地域や職域ごとに国民義勇隊が編成され、その多くは、爆撃による火災が燃え広がるのを防ぐために防火帯を作る「建物疎開作業」に動員されていました。原爆が投下された八月六日も、広島市の中心部で建物疎開作業が行われており、市内のみならず、周辺町村からも動員された大勢の人たちがいちどきに被爆しました。爆撃による被害拡大を防ぐための建物疎開作業への動

員により、原爆被害が大きくなってしまったのです。原爆が投下された後、隊員の安否を気遣って市中心部を尋ね歩いた人たちにも、残留放射線が襲いかかりました。国民義勇隊の被爆に関する企画展の開催に当たり、関係資料の発掘に努めました。残された記録が少ないため、編成の過程や、被爆当日の動員や被害の全容をたどることは非常に困難でした。被爆資料のほか、わずかに残されたかつての町や村の役場や企業の記録、遺族の手記、市民が描いた原爆の絵などを通じて、国民義勇隊の被害の状況、残された人たちの悲しみと今後の苦難の歩みの一端を紹介します。

地区国民義勇隊の被害を中心に紹介。出勤して上くなった人の遺品のほか、木村秀男さんの紙芝居も展示しています。

■職域国民義勇隊
油谷重工と藤川製鋼所の職域国民義勇隊の被害を中心に紹介しています。

■国民義勇隊の被害の全容
戦傷病者戦没者遺族等援護法による援護の対象者を特定するために作成された国民義勇隊死没者名簿により、国民義勇隊ごとの動員数と死亡者数を紹介しています。

【お問い合わせ】
平和記念資料館学芸担当まで。
☎(082) 241・4004

■あなたの街にも
広島市内や近郊にある国民義勇隊の慰霊碑などを写真で紹介しています。

■はじめに
国民義勇隊の編成や建物疎開作業への動員状況を役場文書や当時の新聞などにより解説しています。

■地域国民義勇隊
広島市国民義勇隊草津大隊、市外の川内村国民義勇隊と大竹



義勇隊の碑(広島市中区中島町)

新着資料展を開催中

—589点の寄贈がありました—

■会場 広島平和記念資料館
東館地下1階 展示室（4）

■期間 平成23年6月12日まで

広島平和記念資料館には、被爆から六十五年が経過した今日でも、被爆者やその遺族の方々から、被爆資料等が寄せられています。

平成二十一年度も、原爆の犠牲者や遺族が経験した惨劇や悲しみ、苦しみを、他の誰にも経験させたくないとの願いを込めて五十七人の方から、五百八十九点の資料が寄せられました。これらは、家族のもとに残ったわずかな遺品や、被災の痕跡が残る資料です。会場では、このうち百二十四点を展示しています。

【お問い合わせ】平和記念資料館学芸担当まで。

☎(082)241-4004

中・高校生の平和学習に ワークブックを ご活用ください

昨年度の小学生用に続いて、中・高校生用の「平和記念資料館 平和学習ワークブック」を作成しました。小学生との知識や感受性の違いを考慮して、表紙や設問を変更しています。

B5判カラー八ページで、記入欄を大きく設け、自由に書き込みができます。三段階の学習で、生徒の自主的な取組をサポートします。

ステップ1 資料館を訪れる前に

紹介している図書や資料館のホームページなどを参考に、原爆ドームや原爆の子の像などについて調べます。

ステップ2 見学しながら

気づきや思いを書き込んでいきます。展示順に、六つのチェックポイントを紹介しています。



ステップ3 学校に戻って

学んだことを思い出しながら、平和な世の中をつくっていくためには何が大切かを考えます。

●平和記念公園散策マップ
公園内の主な慰霊碑などを紹介しています。

解説や指導ポイントを記入した指導者用のテキストもあり、いずれも無料です。希望者は資料館ホームページ（<http://www.pct.city.hiroshima.jp>）↓「平和学習用申請書」で請求フォームをダウンロードし、事前にお申込みいただけます（送料は着払い）。お問い合わせは、平和記念資料館学芸担当まで。

☎(082)541-5544

第九回 国内ジャーナリスト研修 『ヒロシマ講座』を開催

被爆後六十五年が経過し、被爆者は高齢化し、被爆体験の風化や、平和意識の低下が懸念される中、広島市は、核兵器廃絶と世界恒久平和を願う「ヒロシマの心」を伝え、核軍縮に向けた世論醸成を図るため、平成十四年度から「国内ジャーナリスト研修『ヒロシマ講座』」を開催しています。

この講座は、新聞記者など若手ジャーナリストに、被爆の実相や「ヒロシマの心」について、総合的、体系的に学ぶ研修プログラムを受講してもらい、研修成果を報道や論説活動を通して広く国内外に発信してもらうこととするものです。

九回目となる今年度の受講者は、地方紙の二十三歳〜三十八歳の記者十一人で、七月二十八日（水）から八月七日（土）までの十一日間、被爆者の証言や原爆被

害の医学的影響などについて講習を受けるとともに、平和記念式典を始めとする平和関連行事の取材を行いました。

参加者からは、「何ものにも代え難いヒロシマの生の声を聞くことができた」「平和を生み出している人々に会うことができた」等の感想をいただいています。

なお、参加者による掲載記事を、広島市ホームページ上で紹介する予定です。

【お問い合わせ】広島市市民局国際平和推進部平和推進課まで。
☎(082)242-7831



原爆ドーム内部を見学する研修参加者

中・高校生ピースクラブ ヒロシマの心を伝えよう 「サダコと折り鶴ポスター展」

平成十四年度から広島市と本財団は、平和推進のための人材育成を目的として、「中・高校生ピースクラブ」を開催しています（後援―広島市教育委員会）。今年度は七月から八月にかけて計五回開催し、二十四人が参加しました。

開催中は資料館の見学や被爆体験講話などの活動を通して、



ポスター展には秋葉市長（中央）も激励に訪れました

原爆被害の実相や、被爆による白血病で亡くなった佐々木禎子さんの一生について学ぶとともに、リーパー本財団理事長から核兵器をめぐる世界の状況を聞きました。また、八月六日に開催する「サダコと折り鶴ポスター展」で展示の解説をするための準備をしました。

ポスター展では、英語での解説に挑戦した子どももあり、国内外の多くの人に被爆の実相と平和の大切さを伝えることができました。会場内に設置した折り鶴コーナーでは、子ども達のメッセージに共感した方たちが、たくさん折り鶴を折ってくださいました。また、子ども達の演奏による被爆ピアノミニコンサートでは、禎子さんの甥にあたる佐々木祐滋さんの、禎子さんをモチーフにした歌の披露もありました。

参加した子ども達からは「原爆や平和のことを知る良い機会になった」「来年も参加したい」などの感想が寄せられ、平和活動への関心は大いに高まりました。

（平和記念資料館啓発担当）

平和への思い育む 夏のキャンプ

本財団では三滝少年自然の家と似島臨海少年自然の家との共催で、小学四年生から中学三年生までを対象に、「こども平和キャンプ」を開催しています。八月二日から四日にかけて行われた今年のキャンプには、小学生四十五名、中学生五名の参加がありました。

期間中は、広島平和記念資料館をヒロシマピースボランティアとともに見学し、被爆の実相や原爆の怖さなどについて学んだほか、戦時中の食事体験とし



資料館での展示解説に耳を傾ける参加者

て折免滋君の弁当（資料館に展示してある黒ごげになった弁当を再現したもの）を食べました。また、被爆体験証言を聞きボランティアとともに公園内の碑めぐりをしました。

特に参加者に好評だったのが、被爆ピアノコンサート、海水プール、バウムクーヘン作りでした。被爆から六十五年を経た現在でも綺麗な音色を響かせるピアノに、感動を覚えた参加者が数多くいました。また、友達と協力しながら丹念に焼き上げたバウムクーヘンのおいしさや、団結して作る喜びを味わいました。似島がバウムクーヘン発祥の地となった歴史についても学びました。

参加者にとって夏の思い出のページになるとともに、戦争と平和を考える良い機会になりました。また、キャンプ終了後、二十人が、平和への気持ちを抱き平和記念式典に参列しました。

キャンプで生まれた友達とのきずな・平和への思いを、これから先、大きく育んでいくことを願います。

（平和記念資料館啓発担当）

多言語に翻訳した被爆体験記を館内公開しています

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、外国人来館者に被爆の実相を伝えるために、収集した被爆体験記を英語、中国語、韓国・朝鮮語に翻訳し、公開してきました。このたび、被爆者の体験や思いをより多くの国々の人々に理解してもらうために、六編の被爆体験記を従来の三言語にフランス、スペイン、ロシア、ドイツ、ポルトガル、イタリア、タイ語の七言語を加えた十言語に翻訳し、地下一階の体験閲覧室で公開しています。

今回翻訳した体験記は、八十三歳のときに被爆した男女六人のもので、被爆前後の生活、被爆時の状況、平和への思いなどが記されています。幼い二人の娘を失った女性の体験記には、「許して、許して、この親を許して。」と娘への引き裂かれるような思いが伝わっています。体験記を読んだ方からは、「母国語で読むことで、被爆者の思いをより深く感じられた」という声が寄せられています。

（原爆死没者追悼平和祈念館）

英語で学ぶ 「ヒロシマ」

平和記念資料館では、原爆被害に関する基礎知識と英語による表現方法について学ぶ「英語で伝えるようヒロシマセミナー」を実施しています。受講者が外国人と交流するときに、広島

島の原爆被害の状況を的確に伝えることができるようになることを目的として、平成十八年度に開始しました。留学を予定している高校生を主な対象とした「高校生の部」と、海外渡航の予定や、ホームステイなどで外国人を受け入れる機会のある一般市民を対象とした「一般の部」を開催しています。

平成二十二年五月二十三日(日)・七月二十五日(日)に開催された「一般の部」では、合計約百二十名がセミナーを受講しました。

各セミナーの前半部分では、米国出身の英語教員クレイグ・ネヴィットさんが講師を務め、「今でも広島は放射線に汚染さ

れているのか」など、広島島の原爆投下について外国人からよく寄せられる質問に対し、英語で簡潔に答える方法を説明しました。

第一回セミナーの後半部分では、本財団のステイブン・リーパー理事長が、五月に開催されたNPT(核拡散防止条約)再検討会議の結果を踏まえ、世界の核兵器の現状について講演しました。

第二回セミナーの後半部分では、広島市の原爆投下や平和記念公園の慰霊碑に関する質問に対して、回答案をグループごとに英語で考えてもらうグループワークを行いました。参加者は、



7月25日グループワークの様子

「被爆者の人々はアメリカ人に対してどんな感情を抱いているのでしょうか」等の質問について、ネイティブスピーカーのボランティアの助言を受けながら回答を作成していました。

セミナー終了後、「このよう

なセミナーに参加することにより、広島を訪問する外国人の方々に平和に関する意識を高めてもらう手助けができるようになります」と「グループワークでは、いろいろな人の意見を聞くことができ有意義だった」等の感想が寄せられました。

「原爆の絵」が完成 被爆の実相を後世に

本財団は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、平成十九年度から、本財団被爆体験証言者とボランティアの生徒が共同で、証言者の記憶に残る光景を描く「原爆の絵」の制作を行っています。

平成二十一年度から、三人の証言者と九人の生徒が三グルー

プに分かれて制作に取り組み、このたび計九点の絵画が完成し、本財団に寄贈されました。

七月五日(月)、基町高等学校展示ギャラリーで完成披露会を行い、梶本淑子さん、寺前妙子さん、渡邊美代子さんの三人の被爆体験証言者と、創造表現コースの生徒九人が出席しました。

完成した「原爆の絵」は、被爆体験をより一層理解してもらうため、証言者が被爆体験講話などに活用するとともに、被爆当時の広島の様子を絵画という形で残すことにより、原爆被害の実相を後世に継承していきます。

制作した生徒からは、「罪のない命を奪った原爆による悲劇を二度と繰り返してはいけないと改めて強く思った」「今後もうこうした活動を通して、戦争の事実と平和の尊さを未来に伝えていきたい」「被爆の実相を知り、平和で明るい未来を築くことの大切さを世界に発信しているのは私たちのだと改めて実感した」などの感想が寄せられました。

(平和記念資料館が発担当)



「御幸橋」

制作：徳永美帆さん(基町高等学校普通科創造表現コース3年)、渡邊美代子さん(被爆体験証言者)



「先生の支え」

制作：梶田みゆきさん(基町高等学校普通科創造表現コース3年)、寺前妙子さん(被爆体験証言者)



「焼けた赤ん坊と母親」

制作：平野弘美さん(基町高等学校普通科創造表現コース3年)、梶本淑子さん(被爆体験証言者)

「姉妹・友好都市の日」 記念イベント 市民が海外 文化を堪能

広島市は、海外の姉妹・友好都市提携六都市に対し、市民の方々に一層親しみと理解を深めていただくため、平成十三年に都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を設けて記念イベントを開催しています。平成十五年度からは、この事業を本財団が市から受託して実施しています。各イベントの進行役はヒロシマ・メッセンジャーが務めました。

大邱の日

五月三日(月・祝)から五日(水・祝)まで、ひろしまフラワーフエスティバル会場で記念イベントを開催しました。主催―平成二十二年大邱の日実行委員会

三日、セレモニーの後、大邱広域市芸術団(HATA)による太鼓演奏や韓国伝統舞踊の披露、広島市の和太鼓音楽集団「太鼓本舗かぶら屋」の太鼓演奏、両グループによる協演を行い、大変盛り上がりました。

三日間を通して、「韓国・大邱マダン(ひろば)」を設け、大邱広域市の物産や観光等の広報、韓服を着て記念撮影、韓国検定、毎年好評の韓国家庭料理の販売等を行い、韓国からの留学生と市民が楽しく交流しました。また、大邱広域市から広島市へ贈呈された大太鼓の演奏や来場者打ち鳴らし体験を行うなど、八百三十人が訪れ、大変な盛況でした。



韓服を着て記念撮影(「大邱の日」記念イベント)

ハノーバーの日

五月二十三日(日)、広島市留学生会館で記念イベントを開催しました。主催―平成二十二年

度ハノーバーの日実行委員会

上田宗箇流茶道の体験、本場ドイツ製法のバウムクーヘン・ソーセイジ作りの実演又は試食、ルツチェラーゲ(二つのグラスに異なる酒を注ぎ、一気に飲み干す)を行いました。

また、ドイツ音楽コンサートでは、プロの音楽家が素晴らしい演奏を披露した後、来場者全員がドイツ語で「野ばら」を合唱しました。

このほか、ハノーバー・ドイツの紹介展示を行い、ハノーバー電車のペーパークラフト体験やドイツの絵本の展示・読み聞かせは子供達にも大好評でした。

二百八十人の来場者は、多彩なプログラムを通して、楽しくハノーバーやドイツへの理解を深めていました。

モントリオールの日

七月二十五日(日)、広島市留学生会館で記念イベントを開催しました。主催―平成二十二年度モントリオールの日実行委員会

まず、来場者は、カナダビール、ポストンレタス、プーティン(ケベック州の伝統料理)の

試食、メープルコーヒーの試飲に舌鼓を打ちました。その後、モントリオール市からの留学生が発表を行い、次いで「シルク・ドゥ・ソレイユ」の作品「ゼッド」の映像を紹介しました。

最後に、日本在住のカナダ人によるケルト系民族音楽バンド「ミディ・エレファント」のコンサートを行いました。

このほか、カナダの特産品やモントリオール市への姉妹都市提携十周年記念品の展示、情報誌ココ・モントリオール「モントリオールの日」特集号の配付等を行いました。

二百八十人の来場者は、楽しみながらモントリオールやカナダへの理解を深めていました。

ボルゴグラードの日

九月十二日(日)、広島市留学生会館で記念イベントを開催しました。主催―平成二十二年度ボルゴグラードの日実行委員会

まず、来場者は展示コーナーでボルゴグラード市民との交流や街の様子等の写真を見た後、ピロシキ、ボルシチの試食、グ



ロシア民謡「トロイカ」合唱(「ボルゴグラードの日」記念イベント)

等の試飲を楽しみました。

セレモニーに続いて、ロシアからの留学生とのクイズや手遊び、ホームステイを体験した子供達の発表を行いました。

コンサートでは、ピアノ演奏と合唱、様々な楽器のアンサンブル、マリンバ打楽器アンサンブルの三組が、ロシア音楽を中心に演奏を披露した後、来場者全員がロシア民謡「トロイカ」を合唱し、会場が一体となりました。

前日のロシア料理教室と合わせ三百人が訪れ、ロシアやボルゴグラードへの理解を深めました。

(国際交流・協力課)

青少年のための 国際交流・協力 セミナーを開催

八月二十九日(日)、広島市留
学生会館で「青少年のための国
際交流・協力セミナー」を開催し、
二十一名の参加者がありました。
主催―本財団。後援―独立行政
法人国際協力機構(JICA)
中国国際センター他二団体。

まず、青年海外協力隊員とし
てアフリカ大陸南東部のマラウ
イ共和国に、理数科教師として
赴任した谷口京子たにぐちさんから、現
地での活動について講演をして
いただきました。谷口さんは、

現地住居、衣装、食物、学校の
様子などを、映像や実物を用意
して分かりやすく説明し、各国
の実情に合わせた国際協力支援
の必要性を訴えられました。

次に、バンングラデシュからの
留学生のカビル・アハミドゥル
さんとジャーマン・マームドさ
んからバンングラデシュについて
の発表をしていただきました。
発表は英語のため、ポランティ
ア通訳者に通訳していただきました。
現在の国の生活状況や格
差などの問題点を、映像を使用
して説明していただきました。

休憩後、若者によるバンングラ
デシュ支援団体「ボンドゥ」に
よるワークショップを行いました。
各グループに分かれ、国際
協力支援に必要なものについて
協議し、発表を行い、今自分達
に何ができるかなどについて意
見を出し合いました。

参加者からは、「普段知ること
ができない開発途上国の実情が
よくわかった」「一人ひとりが意
見を出し合うことで様々なこと
が分かって良かった」などの感
想が寄せられ、参加者が一体と
なって大変盛り上がりました。

(国際交流・協力課)



「ボンドゥ」ワークショップでのグループ発表

JICAボランティアが 千羽鶴奉納 任国からの平和 への願いを広島へ

七月末にスリランカ、ニカラ
グア、ブラジルから帰国した青
年海外協力隊員・日系青年ボラ
ンティアの十名が、それぞれの
任国にんこくから持ち帰った千羽鶴を、
八月に平和記念公園内の「原爆
の子の像」に奉納しました。各
国での原爆展開催の中心となっ
た広島出身の独立行政法人国際
協力機構(JICA) ボランティア
はもちろん、関東を始め、
北海道や鹿児島からも来広しま
した。

折り鶴は、原爆展を訪れた現
地の人々に、JICA ボランテ
ィアが指導して一羽ずつ折って
寄贈してもらい、ボランティア
達が大切に繋ぎ合つなぎあわせました。

折り紙が手に入らない現地で、
包装紙や新聞、雑誌を利用し
た、色も形も不ぞろいな鶴です
が、羽には「平和が続きますよ
うに」「核をなくそう」といっ
た平和へのメッセージが現地語
で書かれています。

「任国で広島、長崎に核爆弾
が落とされたという事実を知っ
ている人は多いが、その被害の
大きさや悲惨さといった状況は
ほとんど知られていない。原爆
展を行うことで正確な情報を知
ってもらおう事もできたし、平和
の大切さを伝えられた」(ス
リランカ隊員)、「奉納を終え、
それぞれの国から持ち帰った
多くの人の祈りの気持を、無
事に広島に届ける事ができて
安心した」(ニカラグア隊員)
と、帰国隊員達は充実した気
持ちを述べるとともに、「現
地で来訪者から原爆や戦争に
ついて質問を多く受けたが、答
えられない事もあった。正確な
情報を提供できるように、広島県
民として、これからも平和に関
する学習を続けていきたい」と
気持ちを新たにしています。
(JICA 国際協力推進員 植松つねまつ弥穂)



鶴を奉納するJICAボランティア

外国人市民のための生活相談 コーナーを開設しています

本財団では、日本語に不慣
れな外国人市民のための生活
相談窓口を、国際会議場一階
の国際交流ラウンジ内に開設
しています。ポルトガル語、
スペイン語、中国語、そして
英語を担当する相談員四名が
常駐し、窓口での生活相談の
対応や生活関連情報の提供を
行ない、必要な場合は通訳者
として相談者に同行して関係

機関に出向き、諸手続きのお
手伝いをしています。

開設日時は月曜日から金曜
日の午前九時から午後三時
三十分(祝日、年末年始、八
月六日を除く)。また、金曜
日の午前十時三十分から午後
三時三十分は、安芸区役所二
階 区政振興課内でポルトガ
ル語とスペイン語の相談をお
受けしています。
【お問い合わせ】外国人市民
のための生活相談コーナー
☎(082) 241-5010

留学生生活支援セミナー 留学生のための 防災センター訪問

広島市留学生会館では、今年度の留学生生活支援セミナーを年三回シリーズで行います。その第二回目「留学生のための防災センター訪問」を六月二十六日(土)に開催しました。「防災センター訪問」では、昨年

に引き続き広島市南消防署の協力で行います。その第二回目「留学生のための防災センター訪問」を六月二十六日(土)に開催しました。「防災センター訪問」では、昨年引き続き広島市南消防署の協力でバスの送迎を行っていただき、当館居住の五カ国十九名の留学生とその家族、国際交流員、職員の一、計二十一名が参加しました。

に、なるべく姿勢を低くし、口元をハンカチ等で覆って壁伝いに避難すること、また、避難梯子を伝って下りることを体験しました。防災センターの担当者から、平素より住居の避難路について確認しておくようにとの指摘を受けました。

次に地震に遭った場合の対処法を学びました。参加者全員が震度七の揺れを体感しました。以前は、地震の際には火の元確認が第一とされていましたが、今は、家具や建物の倒壊によるけがを防ぐことが第一となる行動だと教えてもらいました。

次に消火器の仕組みを習い、参加者の過半が実際に噴射を体験しました。「火事だ」と大きく叫び、同時に火元に向けて噴射を行いました。最後に、一一九番の通報練習を行いました。



実際に消火器の噴射を体験する留学生

いました。片言の日本語でも通じることが確認できました。

参加者からは「とても勉強になった」、「消火器の噴射時間と距離が十五秒、五メートルと具体的に分かった」との感想がありました。

(広島市留学生会館)

留学生による 平和フォーラム

広島市留学生会館では、今年度の平和フォーラムを二回シリーズで行い、七月二十四日(土)に広島原爆養護ホームむつみ園を慰問し、八月六日(金)に平和記念式典に参列しました。

広島原爆養護ホームへの慰問は今回が初めてでした。慰問の前には留学生会館の居住者や、会館を利用されている一般の方々、そして職員が折り鶴を折り、当日、留学生代表が養護ホーム居住者代表の方に贈呈しました。

初めに、インドネシアからの留学生が「皆さまの体験をお聞きする貴重な機会に感謝し、平和について一緒に考えたい」と挨拶しました。その後、留学生達はグループに分かれ、



被爆体験証言に聞きいる留学生たち

証言者の方から貴重な体験をお聞きしました。どの方も一言一言に心をこめてお話ししてくださいました。留学生達は時には涙を浮かべ、メモをとり、質問をしながら熱心に体験談に聞きいっていました。むつみ園から見る青葉の美しい夏の景色からは想像も出来ない恐ろしい原爆の破壊

力と、証言者の方が失ったもの大きさ、ショックを受けた留学生もいました。同時に留学生にとっては、廃墟の中から復興のために力を尽くしてこられた証言者の方の心の強さに感動し、自分たちが平和な世界をつくっていくという意思と行動を継承していくことを自覚した貴重な機会になりました。

体験をお聞きした後には、グループごとに用意しておいたボードにメ

ッセージを書いて、記念写真をとりました。証言者の方も留学生に「日本との平和の架け橋になってください」と声を掛けていらっしゃいました。

今年の平和記念式典は戦後六十五年の節目にあたり、潘基文国連事務総長のご参加もあり、留学生達にとって大変関心の高い有意義な体験になりました。当日は暑い中、早朝の集台にも関わらず、遅刻する者もなく式典会場に到着し、会場の厳かな雰囲気と年配の参加者の祈るお姿を見て、少し緊張した面持ちでした。

一連の平和学習を通して、留学生達は広島に留学してきた意義を改めて自覚し、今なお苦しんでおられる方々と接することにより、戦争がもたらした計り知れない恐ろしさや悲しみを身近に感じました。そして、平和な世界を実現するために自分達が今、共に出来ることは何なのか、母国でできることはないかを考える重要な体験学習になりました。今後とも、留学生達には、広島で勉強しているという特別な意味を自覚してもらい、平和への貢献を考えるきっかけをつくってもらうために平和フォーラムを継続していきたいと考えています。

(広島市留学生会館)



本年10月25日に逝去。享年79歳。

プロフィール

(はやし としひこ)
民間青少年団体の指導運営に携わって49年、青少年活動、青少年教育専門家としてこの道一筋に今日に至る。昭和43年、日独文化協定に基づき、初めて日本青少年代表を全国から選抜し、その青少年使節団の指導監督として訪独。その際、ハノーバー市長との出会いが今日の広島ハノーバー両市青少年交流に発展。両市は昭和58年姉妹都市提携調印を行った。このほか、ドイツ国営北ドイツ放送協会と広島テレビ放送の姉妹提携の仲介など広島ハノーバーに関わる各種の交流提携に橋渡しの役を行ってきた。

“平和について思う”

遺稿

若者へ平和を問う

広島国際青少年協会 総主事

林 壽彦

簡単にいえば大人は汚い。我田引水という言葉があるが、大人は皆自分の所へ水を引こうとする。しかし、若い人は自分の所に水を引く事をあまり考えないところに良さがある。若い人たちが考える平和と、年をとった人たちが考える平和とは異なるものであり、戦争を知っている人たちの平和と、戦争を知らない人たちの平和もまた異なると思う。戦争を体験した人たちは「あの苦しみを二度と繰り返してはならないから平和は大切である」と言い、戦争を全く知らない人たちは「平和だからいいじゃないか。難しく考えなくて、平和とはいいいものだ」という感覚なのだろう。

オリンピックを例にあげると、若い人がオリンピックに対して考えることと、年をとった人が考えることはまた異なる。モスクワオリンピックはいわゆる冷戦問題で日本も参加していない。拒否して参加しなかった国が多くあった。私がおかしいと思った。オリンピックを純粋に考える前に政治的に、経済的に大人は考える。しかし、私はテーマを提供して、若い人たちが純粹にオリンピックは必要であるのかということから考えることは大事だと思う。広島市の秋葉忠利市長と長崎の田上富久市長とで平和の祭典としてのオリンピックを開こうと言った。広島でオリンピックを開催するのはお金がかかるから反対だと言った人が出てきた。商業的な問題と政治的な問題が出ているが、私は違った意味でオリンピック自体を政治や商業よりもっと根本的な問題、なぜ一都市で開かなければならないのかという事に疑問を抱いている。実際、国が開催しているが、お題目としては一都市で開催する事になっており、今回の場合広島・長崎の共同開催はできないとなった。そのため、長崎が辞退して協力するということになった。古代アテネの頃のような小規模のものであれば可能だろうが、今のようにならなくなってしまう。一都市では開催できない。国が動いて初めて開催できるのに、なぜそれを改めないのか。何かメリットがあるのではないかと勘繰ってみたい。お金のからまないオリンピックをつくらうといった上で、一都市で開

催するならば話は分かる。しかし、そのような方法をとらないのであれば、国のレベルで主催するという方法に変えるべきではないか。オリンピックが発祥した古代アテネのオリンピックで開催された素朴なオリンピックは非常に良いのではないかと思う。オリンピックは縮小するのではなく、一都市でも開催できると思う。そのような点を考えると、一つの転換期として考えるいい材料になるのではないかと思う。実際、広島が開催するとしたら、国が前面に出てくる事になり、純粋なものにはならない。

国際会議と国際交流は両輪である。私には言うが、スポーツもそうあるべきである。しかし、大人の手にかかるとそれは崩されてしまう。利益の上がる事柄に関しては、大人はみな手を挙げる。利益が上がらない事柄になると、みなそっぽを向いてしまふ。

しかし、利益は上がらなくても、非常に大事なことは皆で支援すべきだと思う。たとえば、平和市長会議の名前で核兵器廃絶を二〇二〇年までに実現しよ

「ご生前のご功績を偲び、心よ
りご冥福をお祈りいたします。」



青少年国際平和未来会議ヒロシマ2009の参加者とともに

うと一生懸命言っているが、なくならないかもしれない。だからこそ、なくなるようにしよう。一生懸命なのである。オバマ大統領がブラハ演説で核をなくすといっているが、オバマ自身いつ居なくなるのかはわからない、まだまだ先の話であると言っている。今核を持っている国がはたして二〇二〇年までに全て廃絶するかというと、とても難しいと思う。しかし、だからと言ってやめてしまえばならない。若いからこそ、核兵器をなくすためにどうしたらよいか、ということを考える人であってほしい。

“ヒロシマの心”を発信する人々

「ヒロシマ」を 朗読によって伝えたい

—ひろしま音読の会—

会の名前の由来は何ですか？

私は結成当時のメンバーではないのですが、「朗読」ではないのですが、「音読」とした理由は、言葉を出して丁寧に伝えるというよりはむしろですが、それに加えて、日本語の美しい響きを伝えたい、という思いが込められています。そして、「ヒロシマ」を声に出して継承したい、ということから、「ひろしま音読の会」と名付けました。

結成のきっかけは何だったのですか？

この会は、朗読すること、言葉を出して伝えることの好きな人たちの集まりで、趣味の会として二〇〇〇年に結成され、現在まで地道に活動を続けて来ました。

どのような方たちで構成されているのですか？

おもに現役あるいは既に現役を退いたアナウンサーなどで構成されています。女性が多いのですが、現在は男

性三名を含む二十名の会員で活動しています。

どのような活動をされているのですか？

年に二回、大きな発表会として、春の発表会と、夏の発表会「ヒロシマを朗読する」は、結成から十年、毎年かかさず行ってきました。また、中央図書館主催の「子ども読書まつり」などで朗読したり、平和をテーマにしたコンサートにも出演してきました。普段の練習は月に二、三回のペースで行っていますが、発表会の前には週二回のペース

で読み込みを行っています。

「ヒロシマを朗読する」については、毎年夏に、市内の高校生たちと一緒に、原爆文学や詩、被爆者の手記から題材を取り、オリジナル台本を作って朗読を行っています。観客の皆さんの年齢層は様々なので、小学生が聞いても分かりやすいように、内容を工夫しています。出演する高校生は主に学校で演劇部や放送部に所属する生徒たちです。発表会の前には、音読の会の会員と同じように、何日もかけて読み込みの練習を行います。リハーサルを何度も繰り返し、みんな熱心に取り組んでくれます。

これからの活動についての思いなどを聞かせ下さい。

これからも年に二回の大きな発表会は毎年続けてゆきたいと考えています。

また、会員は現在、全員が国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の朗読ボランティアに登録しており、みんな朗読を通して被爆体験を語り伝えてゆきたいという思いを持っています。会員のほとんどは戦後生まれですが、幼い頃に原爆を体験

した者も、被爆二世も、数名おられます。これからは原爆を体験していない人達が被爆体験を語り伝えてゆく時代になるでしょう。悲惨な被爆体験を声に出して読んでいるうちに、自分の感情やイメージを言葉にのせてしまいがちですが、本当に伝えるべきは被爆者の方々の思いと言葉だと思えます。微妙なニュアンスまで含めて聞き手に伝わるように、そしてそこから聞き手が個々に想像力を膨らませ、自由に考えていただけるように、しっかりと読み込んで、正しい日本語で伝えてゆきたいと思えます。

若い人々への被爆体験の継承には、こういった活動をつつと積み上げてゆくことが大切なのではないかと考えています。

ありがとうございました。

「ひろしま情報 a-net」の「ひろしま音読の会」紹介ページ
<http://www.a-net.shimin.city.hiroshima.jp/www/contents/1020881843723/index.html>



「ヒロシマを朗読する—しまってはいけない記憶—」で朗読する音読の会メンバーと広島女学院高等学校の生徒たち